

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成29年 5月 第195号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

震災6年『てんでんこ』忘れずに —今こそ伝えたい『老いが伴う本能と社会性』を—

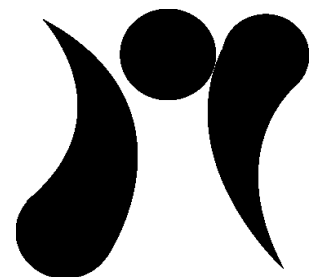
3・11東日本大震災から6年が過ぎた今年3月、新聞紙上に様々な特集記事が載りました。その中に、石巻市大川小学校で息子を亡くした男性と、同校の教師であった父親を亡くした男子大学生が共同して、「震災の語り部」としての活動を始めた、との記事がありました。児童74人と教師10人が津波にのみ込まれ、児童23人の親が提訴した23億円の損害賠償請求訴訟の控訴審が続いている中で、「教師の責任を問われる父親」について葛藤する大学生と、提訴した親の一人が、新たな接点を模索し始めた、との記事でした。

昨年10月26日の一審判決は、教員の責任を全面的に認め、約14億円の損害賠償を命じました。翌27日付毎日新聞社説では、『預かっているのが、自ら避難行動を選択できない子どもである以上、施設側の責任はとりわけ重いということだ。高齢者や障害のある人のための施設、病院なども同じだろう』と述べています。老人介護に携る我々にも、他人事ではありません。

昨年11月半ばに『大川小学校跡』を訪れました。昼過ぎに駅近くのホテルに車を置き、持参した自転車で地図を頼りに探して探して2時間30分。やっと辿り着いた『大川小学校』は、土手の下に広がる石ころだらけの荒地の中、小高い山の下に建っていました。荒涼とした感じの校庭跡に、校舎に入らぬように一本のロープが張られ、隅っこの山の下にある「慰霊の石碑」にお参りをしている人が数人。裏山に向き合う様にして手を合せ、幼い命の無念を思い偲びながら、寒風の中をまた2時間30分を掛けて自転車を走らせ、暗くなってホテルに帰り着きました。遠目には校庭の延長の見える裏山は、『塀』に遮られて日常的には馴染みの無い空間であった事が想像できました。

『津波てんでんこ』は遠い歴史上の教訓であって、『現在的』には死語になっていたのでしょうか。判決が示す『教員の全責任で避難する体制』が本当に万全なのか？可能なのか？本当に子供は自分で判断できないのか？判断してはいけないのか？

(次ページへつづく)



(前ページのつづき)

老人には何か、子供達に伝えねばならない、重要な事があるのではないのか？『判決』は、老人介護の現場にも鋭く突き刺さります。

震災直後の2011年5月23日付読売新聞『人生案内』に、女子大学生・A子さんの『祖母置き逃げた自分呪う』との悲痛な相談が載りました。『あの日、私は祖母と一緒に逃げました。でも祖母は坂道の途中で、「これ以上走れない」と言って座り込みました。私は祖母を背負おうとしましたが、祖母は頑として私の背中に乗ろうとせず、怒りながら私に「行け、行け」と言いました。私は一人で逃げました。祖母は3日後、別れた場所からずっと離れたところで遺体で発見されました。』『助けられたはずの祖母を見殺しにし、自分だけ逃げてしまった。そんな自分を一生呪って生きていくしかないのでしょうか。どうすれば償えますか。毎日とても苦しくて涙がでます。助けて下さい。』

心療内科医の海原純子氏が応えます。『おばあさまはご自分の意志であなたを一人で行かせたのです。一緒に逃げたら2人とも助からないかもしれない、でもあなた一人なら絶対に助かる。そう判断したからこそ、あなたの背中に乗ることを頑として拒否したのでしょう。おばあさまは瞬時の判断力をお持ちでした。その判断力は正しくあなたは生き抜いた。おばあさまの意志の反映です。』『おばあさまは凜とした誇りを持って生を全うされたと思います。おばあさまの素晴らしさはあなたの中に受け継がれていることを忘れないで下さい。おばあさまが生きていたらかけたい言葉、してあげたいことを、周りに居る人たちにかけたり、してあげたりして下さい。そのようにして生き抜くことが憧れだったおばあさまの心を生かす道に思えます。』

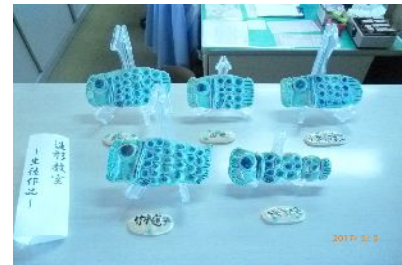
あれから6年。A子さんは今、何処でどの様にしているのか、気に懸ります。勇気をもって力強く生きていて欲しい、と心より願います。お婆さんの『意志と誇り』を受継いだA子さんが、心の中に『勇気と生きる力』を十分に蓄えていて欲しい、と祈らずにはおれません。お婆さんがA子さんに示した『瞬時の判断力』こそが、『老人が子供達に伝えるべき』動物的な感性と感覚が支える『人間の本能と社会性』ではないのか、と強く心に残ります。今の世に、A子さんの『勇気と力』を支える『世間』が拮がって欲しい、『世間』に支えられてA子さんが元気に生きていて欲しい、と心より念じます。

昔から言伝えられた教訓『津波でんでんこ』の背後には、『自然淘汰』をくぐり抜けて生延びた命が、自然に『淘汰された命』の『無念』を受継いで強く生き抜く『覚悟と誇り』が潜んでいます。逞しく生き抜く『勇気と力』を願う『先人達の遺志』が籠もっています。『子供たちは自ら避難行動を選択できない』と予断するのではなく、『社会人経験』が乏しい子供達にこそ、遺伝子で受継いだ動物的な『感性と感覚を磨く術』を教え、『社会を構成』して生きる為の『本能と思想・社会性』を鋭く豊かに養って欲しい、次の世代にも伝えて欲しい、と願います。大震災後6年の今こそ、『でんでんこ』を死語とせず、その背後に潜む『先人の覚悟や遺志』を心に留め、『本来的に老いが伴う本能』に添って最期を迎える『覚悟や誇りや潔さ』を子供達に示す吾身で在りたいと願います。この世で縁を繋いだ人達と『死後にも続く関係性』を保持する吾身に成りたい、と切に願います。

限りある命と命が繋がって成り立つ『社会』の礎として、『老いが伴う本能』に添って『ベストを尽くして迎える最期』を穏やかに後輩達に委ねたい、任せたい、と願っています。

陶芸・造形教室より

陶芸・造形教室講師 中本 万理恵



陶器作品（こいのぼり）

造形教室は、20年前から続いている小麦粉粘土を使った教室です。陶芸教室の喜多先生が始められ、私は7年前から引き継ぎました。当初はグループホームまでかに行かせてもらいました。

それまで一般の陶芸教室を担当させて頂いて、入居者の方との交流は挨拶程度で身近に接する機会は初めての事だったので毎回緊張したことを思い出します。造形教室では小麦粉粘土を使って1ヶ月ごとに課題を決めて季節の花や風物を作っていきます。粘土は入居者の方が口に入れてしまうことも考慮して、毎回小麦粉に食用色粉を混ぜて練っています。赤・黄・緑の3色を作って食用油にひたすと、ふわふわもちもちした不思議な手触りの粘土が完成します。基本3色を使いますが色粉を入れないと白、コーヒーを混ぜると茶色になり、バリエーションがつけられます。

5月は、こいのぼりを作りました。赤い鯉のぼりと緑の鯉のぼりを土台に、うろこは反対色で作りました。皆さんに粘土を配り、作り方を説明しながら私も見本と一緒に作ります。見本を見ながら同じ様に作られる方、丁寧に粘土を丸めて納得いくまで作り続けられる方、形にこだわらず手早く数多く作られる方、課題を聞いて自分の創作で作られる方、皆さんそれぞれの思いで作られています。教室の方針は見本にとらわれず自分だけの作品づくり、形にならなくても粘土をちぎって丸めるだけでも作品になるということです。

近頃では私も緊張がほぐれ、作りながら皆さんと楽しくおしゃべりしたり、課題にちなんだ歌をうたったりしながら時間が過ぎせる様になりました。その中で気付いたことは入居者の方の幼い頃からの生活環境、職歴、性格が完成した作品に表れていることです。作品づくりが終わってから、「今日も楽しかった。」「毎週たのしみにしている。」と言って頂けると至福です。1ヶ月の最終週には作品を写真に撮ります。画像は残りますが衛生面もあり毎回廃棄になるので作品自体は残りません。

今春、園長から認知症の皆さんの自由な発想でものを作り、それを形、作品として残すことはできないだろうかという提案がありました。月曜教室で試しに陶土を使って1月に梅の花、4月にこいのぼりを作ってもらいました。釉薬^{うわぐすり}をかけ焼成しました。課題、見本があると皆さん上手に作られています。なかなか自由な発想は難しい様ですが、小麦粉粘土の合間に陶土を使った自由な作品づくりを交えながら今後の課題として考えていきたいと思えます。

介護福祉士 中田 一宏

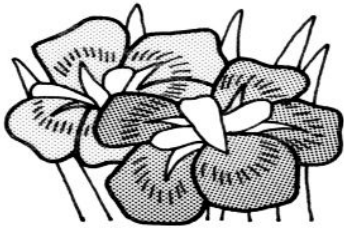
介護の世界に進む最初のきっかけは、中学時代にトライやる・ウィーク（職場体験）で老人ホームを体験したことです。その当時は、どういった職業であるかあまりよく知りませんでした。しかし、その時の体験が頭の隅に残っていたのか大学進学の際には福祉という道を選び、愛知県の福祉大学へと進学をしました。そこで高齢者福祉をはじめ様々な分野の福祉について学び卒業後、最初は知的障害者の施設に勤めていました。しばらくして祖母に認知症の症状が見られ、買い物や通院の付き添い等をするようになりました。将来的には老人ホームの入所も考える必要があるという話が出ました。そんな中、かつて老人ホームで職場体験をさせていただいたことを思い出し、高齢者福祉の分野に進もうと考え、ヘルパー2級を取得しました。

加古川の施設でしばらく勤めた後、更なるスキルアップを目指し西宮へ移り、ショートステイ、ユニット型特養といった高齢者福祉を経験し、介護福祉士を取得しました。故郷へ戻り、せりりょう園の門を叩いたのが今から1年半ほど前のことです。最初はユニット型特養で働き、幾つかの部署を経て現在は、定期巡回型訪問介護の職員として利用者に関わらせていただいています。せりりょう園に来て最初の印象は、広く明るい施設だなと感じました。敷地が広く建物も密接しているわけではないので、程よく太陽が当たる場所が多く、利用者が一人で散歩をしている姿に驚きました。今まであまりそういった光景は目にしたことがなかったからです。

仕事を始め、近くのパン屋やコンビニ、カラオケなどに外出されている利用者達の姿を見て、「大丈夫なのだろうか。」と最初は戸惑いました。でも先輩の話を聞いて地域の中で過ごす余生、とは自分の意思で決め行動し、私達がそれをお手伝いするというものであるということが理解できました。散歩やゴミ捨てに行かれた方とすれ違った時、僅かな時間ですが言葉をお互いに交わしています。そうしていると段々と私のことも覚えて頂き、あちらから声をかけて下さり、ちょっとした相談を受けたりするようにもなりました。滞在訪問中、生活援助で掃除などをしながら利用者様と様々な出来事を、お話しします。そこで学ぶ価値観や知識は、本を読むこと、テレビを見ることとは、また違う貴重な体験だと思います。

先日ですが、入居したばかりの方が、他の方と連れ立って食事を摂りに喫茶へ来られました。連れてきてもらった方は道が分からなかったのが「本当に助かった。」と大層喜んでおられました。後日、案内された方に、そのことを話しますと「困ってたら助けてあげるんは当然やろ。」と言われました。せりりょう園という社会の中で助け合いながら生活しているということを改めて感じました。他にも入居当初は「こんなところは嫌だ。帰りたい。」と困惑していた利用者がおられました。他の方々と触れ合っていく中で笑顔も増え、つい最近「最初は嫌で仕方がなかったけれど、今はとても楽しいです。」と話されました。こういった優しさや温かさが、せりりょう園には満ち溢れていると思います。利用者、地域、そして職員が互いに支えあって生活をしていることをとても実感できました。高齢者と関わっていく中で得られる数多くの経験はかけがえのないものであり、やりがいは確実にあると言えます。そういったことを多くの人に知っていただけたらと思っています。

私はヘルパーとしてはまだまだ未熟で先輩方に助けられながら日々関わらせていただいています。今後も日々研鑽し、よりよいケアを目指していきたいと思っています。



デイサービスより

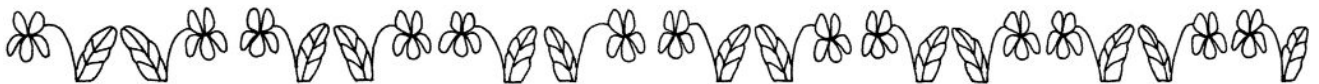
介護主任 西川 由美子

私が、せいりょう園で働きはじめてから早いもので15年になります。振り返ってみれば当初の私は介護の知識や経験など全くなく、全てがゼロからのスタートでした。当然今までの生活の中で、高齢者の方との接点がなかった私なので、初めてお会いする認知症の方、拘縮や褥瘡のある方との関わりに驚きと戸惑いを感じたことを覚えています。そして先輩職員と共に各業務に数日間付き添い、教えてもらいましたが、覚えることの多さと責任の重さに不安と緊張の毎日でした。数日後には一人立ちです。

一人一人顔も違えば、生まれてきた環境も違う、性格も違う中、どなたにも同じ対応で接することの出来ない、そして介護には答えのない難しさを自身で考え探りながら取り組んできました。

私が失敗して迷い、困り、落ち込んだ時、いつも支えてくれたのは周りの上司や仲間からの励ましでした。そして、「気持ちは伝わる、心のない介護は逆に相手に失礼である。」と言われた言葉が今も私の心に残っています。

そして今、私は「教わる側」から「教える側」へと成長させていただき、主任という大きな役割をいただくことになりました。人に教えていくことの難しさを実感しています。しかし、こうして私が成長させていただけたのは、良い上司や仲間にも恵まれたおかげだと痛感しています。これからも初心を忘れず、日々勉強との思いで今を努力して頑張っていく決意です。



平成29年3月13日(月)、4月3日(月) ポップサーカス姫路公演



神戸新聞社より、招待を受けて、サーカスを観覧しました。会場に向かう道中、「サーカスなんて何十年ぶりだろう。」と言って、ワクワクされる方が多くいらっしゃいました。

演目が始まり、空中ブランコで失敗すると「こういう場面も見たかったんやあ〜。」と笑う方、「キャー」と思わず悲鳴を上げる方、「もう1回、がんばれ」とエールを送る方、とそれぞれに楽しんでおられました。皆さん終始興奮されて、まるで別世界に行ったような刺激的な日となりました。

(地域密着型特養 伊藤 勇介)



仏教講話 5月1日(月)



教信寺 法泉院 長谷川 慶吾 住職

本日の仏教講話は天台宗教信寺法泉院 長谷川慶悟ご住職です。昨年、コントラバスをご持参され演奏して頂きました。その感動がまだ残っております。今回も会場に大きな楽器コントラバスと共に入ってこられたとたん、皆さんの嬉しいどよめきが聞こえてきました。

ご住職は最初に「今日は新緑で5月の風が吹いています。教信寺の桜の木も紅葉も若葉が出て緑がいっぱいですね。私の母が短歌を残しています。『法泉の 庭紅葉 紅ふふみ 五月の風に たおたおゆるる』、四季の中でも一番良い頃ですね。今日はお話だけでなく、演奏しながら皆さんと懐かしい思いをさせて頂きたいと思います。」

そして、2500年前にお釈迦様が言っておられた、『人生の幸福とは何か(幸福論)』を現在の人に分かり易くまとめた『スッタニパータ』について話されました。

1. 歴史・賢人・尊敬すべき人からしっかり学ぶこと。(一生勉強)
2. 良い環境に身を置き修練を重ねること。
3. 学びによって自分を覚悟(自覚悟)させること。
(自分を目覚めさせ、その事を悟る事)
4. 今の自分に満足せず探求を重ねること。
5. 先祖・父母・家族・親族を大切にすること。
6. 忍耐強く仕事し、自分を汚す行いは慎むこと。
7. 相手に対して尊敬と謙遜を忘れぬこと。
8. 言葉は美しく、優しく遣うこと。
9. 大切なもの(真理=真の理念、物事の道理)の確認を怠らないこと。
10. 世俗のこと(比較)に自分の心を波立てぬこと。

今度は自分が悟っているかどうかを確認してみましょうと読み上げて頂きました。後日、参加者の方から「あんまり〇が無いけど。」と言いながら、確認表を頂きました。

その後、「お釈迦様の言葉を思い浮かべながら、演奏しますので聴いて下さい。」

【せいりょう園空き情報 平成29年 5月17日現在】

- ・サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」:
A(19.07㎡) 6室、C(24.67㎡) 4室、E(25.80㎡) 2室
- ・サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」: A(33㎡) 3室、C(39㎡) 2室
- ・ケアハウス: 空きなし(バス・トイレ・キッチン付 24㎡)
- ・グループホーム: 空きなし ・グループホームまどか: 空きなし

【問合先】 せいりょう園 Tel(079)421-7156/(079)424-3433

『早春賦』・・・中田 章

中田氏の息子は中田喜直です。『夏の思い出』『小さい秋』『雪の降るまちを』等、四季の歌を作曲された人です。しかし、お父さんが早春賦を作曲されたので自分は謙遜して『春』の歌を作らなかったそうです。



『ハナミズキ』・・・一青 窈

何年か前にアメリカで同時多発テロがありました。今は北朝鮮がミサイルを発射しようとしたり、アメリカがそれに対抗しようとしたり、危機が迫っています。平和が大事です。平和を願い、平和を伝えていこうという曲が『ハナミズキ』という曲です。

『また君に恋してる』・・・森 正明

『上を向いて歩こう』・・・中村 八大

手拍子を打ちながら聴き、一体感がありました。

演奏の後、「坂本九の歌のように上を向いて歩きましょう。段々と身体を動かすのに良い季節となってきています。身体を動かして元気でお会い出来る事を祈念しまして講話を終わります。」とご挨拶され、お話が終わりました。

時間があっという間に過ぎ、まだまだ余韻に浸っていたい思いでした。最初に話されたお釈迦様の幸福論「よい環境に身を置き・・・」という言葉はまさしく、今、よい音楽を聴ける環境に身を置いていることなのだと思います。幸福なひと時を過ごさせて頂きまして、本当にありがとうございました。

(岡村 照代)

☆男性介護者の為の料理教室のお知らせ☆

曜日；毎週金曜日 時間；13：30～15：00 参加費；1回300円
場所；小規模多機能「輝きの家ながすな」デイルーム

6月の献立予定 【担当】藤本 あや（調理師・栄養士）

- 2日；揚げものナンバーワン！「鶏のからあげ」
- 9日；インスタントラーメンを御馳走に！
- 16日；熊本の郷土料理
- 23日；好評！「フライパン1つで出来るパスタ」
- 30日；定食の定番！「豚肉の生姜焼き」



※年齢・性別は問いません。お気軽に、のぞいてみて下さい。

介護についてみんなで語ろう会（4月28日）



介護保険について

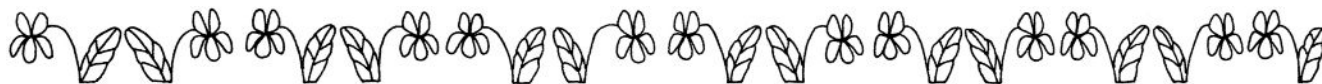
4月の語ろう会では、相談室が担当で「介護保険について」話をしました。

2000年に始まった介護保険制度も17年を過ぎ、3年毎の見直しで改正を重ねてきました。そして2017年4月に新しい制度『介護予防・日常生活支援総合事業』が始まり、来年の4月にはまた、大きな改正があります。

そういう事も視野に入れつつ、まずは新しい総合事業について話をしました。新聞や広告等で告知されましたが、“何故始まったのか”、“何が変わるのか?”、“どうしたらいいのか?” “どこに行ったらいいのか?”等の話をしました。参加されている方々は、すでに介護保険の勉強を十分されて来られた方や、ご家族を介護されておられる方、これから介護保険の申請書を提出しようとする方々でこれまでの知識は持っていらっしゃるかもしれませんが、なかなか想像がつかないようでした。「総合事業は要支援から要介護の人も皆がするのか?」、「初めて申請するときから総合事業対象者になるのか?」、「総合事業になる事でメリットはあるのか?」等々の質問が出ました。一つひとつに答えていきながらも、我々がしっかりした知識を持ち、情報を柔軟に取り入れていく事の重要性を感じました。

そして、ご利用者の皆さまがどんな生活をしたいか思い描けるケアマネでありたいと思います。どんな事でも相談に来て頂けたらと思います。

(介護相談室より)



平成29年4月24日(月) 松尾 貴臣 ~ホスピタルライブ~



松尾さんは全国を巡り、年間350以上のライブを行い全国唱覇され、その後自身でマネジメント会社を立ち上げて、いろいろな活動をされています。「ホスピタルライブ」とは、病院、施設などに自ら赴き、ライブなど行くことが困難な方々に音楽を届ける活動です。

当日のライブでは、せりょう園の利用者・地域の方々が聴きに来られました。お祖父さんとの思い出から作られた曲「へんべいそく」、みんなで歌える曲「ふるさと等…」、アンコールでは、松尾さんが会場内を歩いて観客と交流を持ち、大変盛り上がった楽しいライブでした。

(小規模多機能 衣笠 将弘)